

遊びは非認知能力を育む

—アタッチメントは子どもの心の土台を形成する③—

園長 山崎立哉

9月号で、アタッチメントとは子どもの自律性を育てることをお伝えしました。子どもは、特定の他者（親や保育者）に対するくっつきを通して、崩れた感情をなだめ、回復させていき、自分は確実に保護してもらえる・愛してもらえるという基本的信頼感を獲得していきます。そして、子どもは特定の他者（親や保育者）との信頼感を獲得していく中で、外に向けて探索遊びを通して興味関心を広げていきます。その探索遊びで特定の他者（親や保育者）から離れたたり、くっついたりを繰り返しながら、自分是可以するんだという自信を身につけていきます。これが心のたくましさとなり自律性へと発展していきます。

また、特定の他者（親や保育者）が、アタッチメントを通して子どもの感情に寄り添い、言葉にして感情を映し出すことによって、子どもが他の人の心を理解する能力、共感性、思いやりを育てていきます。

例えば、子どもが遊んでいると、倒れて足に怪我をしました。子どもはビックリして、また怪我が痛くて泣きだします。特定の他者（親や保育者）は、傍により傷口を見て「びっくりしたね！」「痛いね！」「痛いの痛いの飛んでいけ！」等とその子どもの動作や感情に関わる言葉を発します。すると、子どもは自分の身体や心の状態に、それらに合致した適切な言葉を心に貼り付けることができ、子どもの共感性と心の理解能力を育てて行きます。

また、こんな実験があります。初めて注射される赤ちゃんがいて母親は3つ態度をとってみました。①何も動じず、赤ちゃんの気をすぐにそらそうとする母親。②赤ちゃんと同じような表情になりながら気をそらそうとする母親。③赤ちゃんの恐れや怒りに巻き込まれて動揺してしまう母親。すると、②の母親の赤ちゃんが最も泣き止むのが早く、容易になだめられたという結果が得られたという実験です。

この実験からもわかるように、子どもの感情に寄り添い、表情や言葉にして子どもの感情を表現しながら慰めてあげることが、子どもに受け入れられるということです。アタッチメントは、子どもの心の発達に大きくかかわっています。